

問題提起 今なぜ文化学なのか

川本隆史

一 現状から——「文化学原論」を担当して

「今なぜ文化学なのか」という問題に対して大上段から斬り込むことはやめて、僕のおかれている現在の状況からアプローチしてみたいと思います。その出発点は、文化学科唯一（一）の必修科目である「文化学原論」を昨年度より担当しているという事情です。幸か不幸か「原論」というモノモノしい名前にもかかわらず、教えるべき明確な内容が定まっていない（教えている僕自身も聞いたことがない講義題目です）し、どういう形式の「原論」がありうるのかもはっきりしていない。たとえば「文化学原論」をどう翻訳すればいいのかということがあって、私訳としては「The Principles of Cultural Sciences」をあてており、いわば文化についての諸科学が共有する諸原理の入門的な概説という風に位置づけています。そこで既製の型がないのを幸いにして、目につく文化論関係の本を徹底的に洗い出しながら僕なりの型をつくりつつあるわけです。その方向というのが「今なぜ文化学なのか」という問題に対する僕の実存的な（？）解答にあたります。

まず一年間の講義の指針として三つのモットーを挙げ、それを学生と共有することを通じて文化学を創出していこうと考えました。第一が——引くのもおこがましいのですが——カントの「人は哲学を学ぶことはできず、哲学することをのみ学ぶことができる」というものです。哲学（ここでは文化学）は完成された科学Ⅱ知の体系という形で受動的に学ぶことは不可能で、哲学するという方向すなわち自ら考えるところという態度だけが学べるのだという主張は、文化学（文化に対する「徹底的反省」）のアルファでありオメガであるものと思われまふ。残る二つは文化学の方法として僕が強調したい二つのコトバ、批判と共感にかかわるもので、「全ては疑いうる（De omnibus es dubitandum）」と「私は人間である。人間にかかわる何ごとにも私に無縁ではなし（Homo sum: humani nihili a me alienum puto）」とをかかげました（この二つはマルクスが好んだモットーでもありません）。文化を学問的に問題にしようとするばあい、文化に対する批判（自明とされていることがらに対してもその根拠を問い直すことで、現実の危機を自覚しそれを通して浄化する営み）と、人間にかかわることから（Ⅱ文化）へのあくなき共感（異文化をもわがこととして

感得する能力」とは、必須のものだと思われるからです。

次にはどうしても「文化」および「文化学」の初発的定義が必要となるので、これに対しては入学案内における文化学科の説明をとりあえず「公式見解」として用いることにしました。つまり「人間の表現である文化を手がかりに人間とは何かを問う」学問が「文化学」であると。以上の文化学の定義および方法についての導入をふまえて、文化学の歴史（これは今日の報告の第二部にあたりまゝ）をおおまかに辿り、文化学原論の「序論」といたしました。それから本論として「文化学の諸分野」「文化学の諸原理」を考察し「文化学のめざすもの」を結びにおく予定です。「諸分野」に関しては、現在本学科に置かれている四コース六分野（文化史、思想史、民俗学、文化人類学、自然人類学、文化「哲」学）がそれぞれ何をめざす学問であるかを、各分野のキーワード（文化史ならば歴史、思想史ならば思想……等々）に注目しつつごく入門的に位置づける。そうして具体的かつ身近な文化現象（現在は『モモタロウ』を題材にして、これを六つの分野において考察の対象にするとどういふことが見えてくるのかを、先行する研究（主要なものは柳田国男『桃太郎の誕生』と石田英一郎『桃太郎の母』。最近のものでは滑川道夫『桃太郎像の変容』を参照しながら考えてみました。ヘーゲルではありませんが「よく知られてゐるものが必ずしも深く認識されてゐる」とは限らない）わけです。桃太郎のストーリーは周知のことであっても、考えつめていくとさまざまな問題を含んでいることが明らかになります。たとえば、前半の異常誕生説話と後半の征伐譚とはどうつながるのか（鬼退治の動機は何か）、なぜイス、サル、キジがお供になったのか

か（これには方位思想による説明が可能です）等々。こうして『モモタロウ』を学問的に問題にしていくと、民俗学では柳田のいうように日本人の固有信仰を解明する糸口（小サ子物語）がつかめるし、文化人類学者石田英一郎はそれを古代オリエント文化圏での大地母神信仰につなげるという雄大な文化史的民族学の構想を展開しています。大地母神をさらにユングの元型論でのグレートマザー（太母）と結びつけて考えていくと、そこには単なる考古学、宗教史学の領域にとどまらない、極めてアクチュアルな文化の問題が浮かびあがってきます。そうしたケーススタディに基づいて、次に「文化学の諸原理」を文化の概念および機能の概説から始めて、原理として〈子ども〉〈狂気〉〈未開〉を位置づけ、〈シンボル〉〈あそび〉〈幻想〉を各論的に考察する、というのが一応のカリキュラムです。

以上のような方向で原論を構築していきながらも、つねに僕の内では今なぜ文化を学問的に問題とせねばならないのか、という問いが湧きおこってきます。それは文化学（科）のアイデンティティ（付随的には原論を担当している研究者は僕自身のアイデンティティ）への問いかけになるわけですが、僕の元来の専攻・守備範囲からしてその問題をまず思想的な観点から考察してみようと思ひました。

二 歴史の方へ——文化学の系譜をたどる

(一)文化批判から——マルクス・ニーチェ・フロイト

まず大まかな見通しとして文化学の成立時期、文化をあえて学

問的な対象に据えるようになったのは、一九世紀（特に後半）以降であろうと思われまゝ。もちろん一八世紀啓蒙思想、さらにはルネサンス以来の人文主義の伝統を無視することはできませんが、人間の文化を全面的に問題化し始めたのは歴史の世紀とされる一九世紀からと考えてまちがひありません。したがって一九世紀を文化学の出発点として位置づけたい。再出発というのは、すでにソクラテスが自然学ではなく人間を探究の中心において（汝自身を知れ！）ことこそが、文化学のもそももの出発点であると考えられるからで、ただしその後は神学や自然科学の優位の中で文化そのものを問う方向性は余り見られなかった。文化学の再出発を促したのは、文化に対する批判という一連の思想動向で、その中心人物はマルクス、ニーチェ、フロイトの三者です。

マルクスは、人間と自然との物質代謝過程である労働を「人間生活の永久的な自然条件であり、人間生活のあらゆる社会形態に等しく共通なもの」と位置づけます（『資本論』第一部第五章の労働過程論）。彼のいう「人間生活」とは、他の動物と区別される限りでの人間独自の生活様式ということでもささしく「文化」とおきかえてもいい。しかしながら歴史を貫きいかなる社会にも共通な営みとして労働をとらえたマルクスは、他方でこの労働が資本主義的生産様式下においては疎外ないし物象化という変容をこゝろむらざるをえないことも指摘しています。労働という文化的な営みを通じて生み出された生産物が、商品という形態で現われたときに、労働者に対してよそよそしいものとなり、さらに敵対的な力を有してしまふ（疎外）。労働を媒介とした人間と人間との関係が、物と物との関係のように見なされてしまひ（物象化）、

商品の交換価値の基底にある人間の社会的労働を見失ひ、交換を媒介する貨幣に神秘的な性格を付与してしまふ（物神崇拜）。こうしたマルクスによる文化における疎外・物象化という指摘をふまえないでは文化学そのものが成立しないし、マルクスの文化批判こそつねにそこへ問い返していかねばならない文化学の出発点であろうと思われまゝ。（たとえ丸山圭三郎氏のソシュール研究は、彼のモチーフを「文化フェティシズム」批判とおさえることで、マルクスまで戻してソシュール言語学の活性化をはかったもの、といえます。）またニーチェは、文化を「一族の生のすべての表現における芸術の様式の統一」（『反時代的考察』ISS1）として位置づけたが、これも、芸術一般という形でなくディオニュソス的なものとアポロンのなものとという対立図式の中で人間の文化活動の根源を説明しようとする。また彼は「教養俗物」（エッセ文化人）批判を通じてビスマルク体制下のドイツの文化情況に鋭い斬り込みを行うとともに、文化とくに道徳のキリスト教的頽廢の根底にあるものとしてルサンチマン（怨み）という心理を摘出することで、近代ヨーロッパの文化総体への批判を企てています。さらにフロイトは、無意識および抑圧という概念を手がかりにして、文化は原父殺害にともなうエディプスコムプレックスから発生したものであり、そもそも文化の中で人間が生きているということには「居心地の悪さ」がつきものであるから、神経症こそ文化の中の人類普遍的病に他ならない、という文化論を展開しています（『トイテムとタブー』・『文化への不満』他）。彼の文化論は精神分析学の余技というよりも、むしろ彼本来の関心が「歴史と文明の問題」にあったことに注目するならば、それはフロイディズム

の中核に位するものと思われまゝ。結局のところマルクス、ニーチェ、フロイト三者は文化というものを、教養（個人が身につけるべきポジティブなことから）としてとか人類の進歩に教化といった望ましい方向としてとか、無批判に肯定し謳歌するのではなく、一方で歴史を貫く大局的な展望はもちつゝも、他方で現状において疎外なりルサンチマンなり抑圧といった現象が現われざるをえないという文化批判（文化に対して距離をおいてその根拠を問うこと）の視点を設定している——そうした文化批判が、文化学の出発点を確保してくれたのだと考えたい。

(二) 科学としての文化学の成立——タイラー・新カント派・ディルタイ

それに続いて（ないしは同時並行的に）文化を対象とする科学が、一八七〇年代から期せずしてイギリスとドイツにおいて成立してきます。一八七一年人類学の父タイラーの『原始文化』が出版されましたが、その第一章はまさしく『The Science of Culture』と題され、「文化を対象にする科学（単数形）」の出発宣言となっております。タイラーは冒頭で有名な「文化」の科学的定義（知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習等々の……複合的全体）をした上で、ダーウィンスペンサー流の進化論の図式にのっとり文化の発展を探究していこうとする。それと偶然の符合というよりもむしろ一つの時代が共通にもつ関心のなせるわざでしょうが、ダーウィンが自らの進化論を人間にまで適用した著作『人間の由来』が同年に出版される。こうして人間の文化の発生・発展を動物の生活ないし自然との連続性という進化の図式の中で科

学的に考察していこうとする問題構成が一八七〇年代初頭イギリスで成立する。それと時を同じくして、ドイツでは自然科学・科学技術の興隆という風潮の中で、自然科学にモデルを求めていた非自然科学（人文科学・社会科学）の旧来の方法論に対する反省がおこり、自然科学とは別の対象をもつそうした科学独自の方法論の基礎づけをめざすところから、「科学としての文化学」の自然科学からの独立宣言がなされる。具体的には新カント派およびディルタイが、文化科学に精神科学の方法は法則定立や自然現象の説明をめざす自然科学と異なり、個体の記述や文化現象の意味の了解を目標とせざるをえないと主張します。こうした動向はたんに独立宣言という消極的レベルにとどまらず、一九世紀末から二〇世紀にかけてドイツの学界をさまざまな形で挑発し、方法論をめぐる論争の中で鍛えられた労作（たとえばウェーバー）を生み出しながら文化学の新時代を準備してくれました。

(三) 人間と文化への問いかけ——哲学的人間学の試み

こうした科学としての文化学の構築とくに方法論上の整備をうけて、また今世紀の自然科学内部における方法的革新（代表的なものとしては、ユクスキユールの環境世界論、深層心理学、ゲシュタルト心理学）を手がかりにしながら、人間と文化への総体的な問いかけを試みたのが、一九二〇年代のM・シェラーによる『哲学的人間学』(die philosophische Anthropologie)の提唱であり、新カント派本流をつぐE・カッシーラーの『象徴形式の哲学』(Philosophie der symbolischen Formen)の構想であったといえましょう。両者とも伝統的な人間論の枠組み(理性的動物としての

人間、あるいは神の似像としての人間)ではとらえきれない、人間と文化の多様な現象に関しては実証科学(人類学、心理学等々)が集積してくれたデータに注目するとともに、「人間とは何か」を再び哲学の主題におくべきだと主張します。彼らの新しい人間論のキーワードは、シュレーラーでは「世界開放性」(他の生物と異なり、人間だけが環境世界に拘束されず世界にむかって開かれている)であり、カッシーラーでは「象徴を操る動物」(人間を理性によって定義せず、シンボルの宇宙に住む生物として考える)ですが、この言葉とさらに両者がかとも文化論の出発点に生物としての人間をおいた上で、人間という特殊な生物の生きる宇宙を文化としてとらえた点は、現在もなお文化学が継承・発展させねばならない着想だと思われまふ。

四 科学としての文化学の現在

ドイツ二〇年代のこうした野心的な試みは、生松敏三氏もいうように第一次大戦後の危機状況の中ではられた「人間とは何か」を問う文化学の方角だったわけですが、残念ながらファシズム・第二次大戦という三〇年代以降の政治の激動の中で途だえてしまい、そのかわりに大戦後(四〇―五〇年代)アメリカとフランスで別々に「人間の科学」が構想され、現在にいたっています。まずアメリカでは、世界大戦という「世界危機」のさ中において人間と文化についての諸科学のあり方を反省し、それを「人間の科学」(science of man)という形で統合していこうとする企図が、リントンを中心とした社会科学者によってなされました。これはいわゆる「学際的」研究の先駆であつて、文化人類学、社会

学、心理学の三者を中核的な学問としながらとりあえずは人間についての諸科学に必要な最低限の共通了解を創りあげようとして、たとえば「行為」(人間特有の行動)の一般理論を学際的協力のもとで構築しようとしています。(僕のみる限りでは、各分野で従来バラバラであつた概念の用法の交通整理の域を出ていませんが……)これに対して戦後のフランスでは、現象学とくに後期のフッサールの思索(科学の危機と生活世界への還帰の主張)を方法上の手がかりにしつつ、メルローポンティやゴルドマンを中心に「人間の科学」(sciences de l'homme)をめざす研究がスタートしました。そこではソシュールの言語学、ピアジェの発達心理学、ラカンの精神分析学、ミンコフスキーらの精神医学、レヴィ・ストロースの文化人類学といった第一級の研究成果を縦横に使いこなしながら、人間と文化のトータルかつラディカルな把握がめざされています。(かつて流行思想として紹介されたM・フーコーらの構造主義もこうした一連の試みの延長線上にあることは明らかです)。

以上が僕の眼からみた「科学としての文化学」の成立から現在までの流れのアウトラインですが、文化学には科学としてのそれとは別のもう一つの底流があるものと思われまふ。

(四) エセ科学ないしは民間の学としての文化学

それは、文化学が科学として独立・純化していきアカデミズム内部の学際的協力の焦点となる、といった方向とは全く相反するものでありながら、それを抜きにしては文化学の現在を語れないようなもう一つの重要な系譜です。いま仮りにそれを「エセ科学

ないしは民間の学」として形成されてきた文化学の系譜と呼んでおきます。「エセ科学」（これは鶴見俊輔氏の「哲学の反省」から借りた用語です）といっても、科学のサル真似、科学そのものより一段価値の低いものだという含意はなく、厳密性を希求し曖昧なものを排除していく科学の方向性とは違って、科学的厳密性を断念した上で人間と文化に関わる事象をトコトンまで自前の方法でもって追求する、曖昧なものもできる限り集めぬく、という志向をいいます。（レヴィ・ストロースならブリコラージュといふところでしょか）こうした方向は既存のアカデミズムの中では生き残れないので、「民間の学」として自己形成していかなざるをえない。たとえば「科学としての文化学」の成立・発展に並行して一九世紀後半から今世紀にかけて、アマチュアリズム、ディレッタンティズムだといったレッテルをはられながらも何人かの人が人間と文化についてのユニークな考察や地道な資料収集を残してくれています。この「民間の学」としての文化学の野生の努力を、科学として純粹化（＝栽培種化）してきた文化学の流れに劣らず高く評価したいというのが僕の基本的な視角です。

まず日本の方では、柳田国男の民俗学（そのモチーフの一つにはアカデミズム史学に対する強烈な反指定ということがありますが）、柳宗悅の民芸論が挙げられますし、また両者と系譜は異にしながらも、アカデミズムから排斥されジャーナリズムを拠点とすることで「思想としての風俗」といった問題設定を行い当時の文化情況に対して鋭い批判を加えた戸坂潤の活動もそれに含めていいのではないか。また西洋では、ウィリアム・モリスの工芸II民衆芸術論や、フックスの性風俗史、ワールブルクIIの美術史、シ

ュベングラの文化形態学、等々の研究が「民間の学としての文化学」の系譜に加えられます。（ちなみにユクスキユルの環境世界論も在野での発想でありました）たとえばフックスは、アカデミズム史学ではほとんど問題にもされていなかった性風俗の変遷を独力で資料を集め整理・記述していますが、これをフランクフルト学派のベンヤミンは伝統的な芸術把握に対する破壊的作業の基礎として高く評価しています。また全く自己流の関心をもって美術史の研究にむかったワールブルクは、芸術における象徴表現の研究を宗教、呪術、言語および科学の研究から切り離してはならないことに気づき、「神は細部に宿りたまう」のモットーのもと身代をつぶしてまで膨大な資料・文献を収集していく。彼の仕事がかッシーラーのシンボルを軸とした文化哲学（およびペノフスキーの図像学）に多大の示唆を与えたことは周知のとおりです。

以上の粗描に基づいて、文化批判を出発点として、科学として純化してきた方向と民間の学として形成されてきた方向とを文化学の二つの系譜として位置づけてみたい。しかも二つの系譜は完全にバラバラな流れではなく、ベンヤミンやカッシーラーをひくまでもなく、前者が後者を刺激し、後者が前者を活性化するといったつながりは今までもあったし、今後もなければならぬだろうと思います。それで最後のまとめに入ります。

三 そして今——文化学の現在

ここでは「文化学なるものはそもそも成立するのか」、「今なぜ

「文化学なのか」という問いに答える準備作業として、現在「文化学」がありうると思えばそれはいかなる方向においてなのかを考察してみたいと思います。それは前述の文化学の二つの系譜を再統合する方向であるわけですが、これを二つのスローガンに分節化して考えてみたい。一つは「文化学のコモン・センスを求めて」であり、もう一つは「通常科学をこえて」というものです。

(一)文化学のコモン・センスを求めて

コモン・センスとは、中村雄二郎氏が『共通感覚論』他の一連の著作で述べているように、社会的常識（社会の中で人々が共通にもつまつとうな判断力）であると同時に、共通感覚（諸感覚に共通しかつそれらを統合する全体的な感得力）を意味する両義的な語であつて、近代の知のあり方をこえるための有力な手がかりとされていますが、これを文化学の現在の営みの基底にすえることが第一の課題です。つまり、科学として専門分化している文化についての諸科学（その一部が当学科にコースとして設けられています）が、それぞれの観点から文化についてさまざまな説明・記述を試みていますけれども、それが専門分化の宿命なのか個別の研究成果を共通の場で検討しあうどころか、別の分野の研究には耳を傾けないあるいは聞いてもよくわからないといった現状があるのではないかと思われまふ。そこで今必要なのは、人間と文化にかかわる諸科学の共通了解の場を創り上げること、そのため文化学の常識を鍛え上げるべく学際的な研究を大胆に推進することはもとより、研究者個人も一度文化学の初心に戻つて人間と文化への知識のレベルからでなく感覚のレベルから問いかけ

を行うこと、このことではないでしょうか。一八七〇年代に成立した「科学としての文化学」や「民間の学としての文化学」がその後一世紀をかけて人間と文化について膨大なデータを集めてくれたわけですが、そのデータを「文化学のコモン・センス」を形成していくことによって解読していかなばならない。

これについては、人間とは何かを解くカギをシンボルに求めたカッシーラーの『人間』や文化が遊びの中から生まれたことを言語学、歴史学、人類学のデータ総動員しながら解明したホイジンガの『ホモ・ルーデンス』などが先駆的な業績として指摘できますが、まさしく現在という時点では、二つの実例が挙げられます。一つは出版動向という外面的な事情にかかわるものであつて、人間と文化への広範な関心が個別科学をこえた共通の議論の場を要請し、さまざまな企画が出版されているという点です。八一年度分でも梅棹忠夫編『文明学の構築のために』（中央公論社）、東京大学公開講座『文明と人間』（東京大学出版会）、山口昌男編『説きがたり記号論』（日本ブリタニカ）といったシンポジウムものや竹内芳郎氏の力作『文化の理論のために』（岩波書店）があり、本年度完結した叢書『文化の現在』（岩波書店）は、芸術家、学者等の多彩なメンバーを揃えて現代の文化のあり方を反省し新しい「知の枠組み」を提示する企画であり、それに先行した『平凡社カルチャーTODAY』（平凡社）はパターン化した文化認識を打破すべく人間の生活に基本的な動詞（生きる、食べる、住む……）から遊ぶまでの一〇箇をテーマに多方面の論者を集めて自由に論じさせる試みでした。こうした動向からでも、文化学のコモン・センス（特に常識という意味での）、それを形成するため

の共通の討論の広場（語の真の意味での「フォーラム」！）が現在を要請されている、ということは明らかではないでしょうか。

もう一つは共通感覚の意味でのコモン・センスの具体例としてさらに文化学の可能性を示すものとして、網野善彦氏の『無縁・公界・楽』（平凡社）を挙げたいと思います。七四年出版で「日本中世の自由と平和」という副題を付された本書（『社会史』の先駆と評されることもあります）は、子どもの遊び「エンガチ」の考察から始まっています。「エンガチ」や「エンギ」った」というときのエンのもつ魔力を子どもの感覚に即して反省し——これは「隠れん坊」についての藤田省三氏の反省（『精神史的考察』平凡社）に通じるものがあります——ながら、それは人間の心と社会の深奥にふれる意味をもっているのではないかと仮定し、歴史をさかのぼって江戸時代の「縁切寺」、戦国時代の「無縁所」を支えた「無縁」の原理（権力者への私的隸属から自由な生の様式）をさぐり出そうとする。彼は中世法制史の史料の中から「無縁」「公界」「楽」といった一連のコトバをとり出し、その背景にある中世の自由民（遍歴する職人・芸人）の生の様式を浮きぼりにしつつ、これらのコトバこそ西欧の自由・平和にあたるものであって、もとは仏教用語であっても日本の民衆生活の底から湧きおこる自由・平和・平等の理想への本源的な希求を表現するコトバとなったのだと主張します。こうした彼の構想は、漁業史研究や常民文化研究所への参加を通して民俗学と精力的に交渉したことに由来するものでしょう。子どもの遊び（小さき者の声！）にこそわれわれの文化を読みとくカギがかくされているということなのです。また彼は結びの部分で、こうした「無縁」の原理を

ヨーロッパとの比較という枠組みで論じることとどめないで、文化人類学者ターナーの「リミナリティとコムニタス」論（通過儀礼の境界状態下では従来の人間関係とは異質の、自発的・直接的な自己関係コムニタスが発生する。「儀礼の過程」他。）をひきながら、「無縁」のもつ人類学的な普遍性を読みとろうとしています。こうして中世史を徹底的に洗い出していくと、民俗学や文化人類学の方法ないし概念がどうしても必要になってこざるをえない。これに関連して網野氏と並行的に西洋中世史のユニークな研究を続けている阿部謹也氏が、「ハーメルンの笛吹き男」という民間伝承を素材にしたり、M・モースの『贈与論』を読みなおす作業を通じて中世の生活をとらえようとする、あるいは文化の普遍的慣行としての贈与を手がかりにして特殊近代的な商品交換のあり方（市場機構）を相対化してみるという視点を出しています。

したがって歴史学、民俗学、文化人類学といった専門分野に相渉ってその方法・概念を縦横に用いるというセンス（しかも単なる博覧強記でなく、感覚に根をおろした文化への持続的な関心として）を身につけることが、網野、阿部両氏を一つの典型として、現在求められているのではないかと思われれます。

(二)通常科学をこえて

文化についての諸科学の閉鎖性を打破するためにコモン・センスを、という方向はある意味でネガティブな主張にとどまらずが、それとは逆に文化学そのもののもつ力を現在に生かそうというポジティブな課題があります。それは科学史家トマス・クーン

のパラダイム論でいうところの「レギュレーション通常科学」(その科学の内部では厳密な研究成果が続々と現われても、本来科学を生み出した生活の危機といった事態にはもはや戻っていくことのない、科学の情性化したあり方)、それになりかけている(なりはてしている?)人文・社会諸科学をこえる潜勢力II可能性を「文化学」が秘めているのではないか、ということです。これはまた、「民間の学としての文化学」の発想すなわち「野生の思考」のエネルギーの解放という形で言いかえることができます。

時間もないので、こうした通常科学をこえる文化学の方角性を示す動きとして二つを挙げて結びたいと思います。一つは、歴史学とくに歴史叙述の現場で、厳密な史料批判を行えば自動的に過去の事実そのものが解明されていくといった実証主義的な信仰がゆらいできて、説得力のある歴史叙述の方法を模索する中から、本来「歴史」というコトバがもっていた「物語」性が注目されてきたというもの(ちなみに、ヒストリーとストーリーとは語源を同じくします)。もともと「歴史」の発生には、親から子へ世代から世代へと自分たちの由来を語ることで、自分たちの現在を納得しあい未来の生をも構想するという「物語」もしくは「神話」があったわけですが、「歴史」が通常科学として純粋化されていく過程で本来あったはずの「物語」性がおとされていく。柳田國男のアカデミズム史学へのいらだちも実はここに根源があったものと思われませんが、最近では色川大吉氏などが歴史と文学との関係を手がかりに歴史叙述のあり方を反省している。(ここにいらっしやる大江先生の『物語・世界史への旅』という労作もこの方向に加えてよろしいのではないしょうか) こうした歴史叙述に

おける物語性の回復が第一のもの。

第二は僕の守備範囲にかかわるもので、哲学の近代的な純粹化(通常科学化)の中で忘れられてきた「演劇的知」や「身体」や「共感」の問題を復権させようという中村雄二郎氏、市川浩氏、花崎崇平氏の提言です。「演劇的知」とはある場に即して語り行為することで人を動かすと同時に自らの危機にも気づく知のあり方シンボリズム、コスモロジー、パフォーマンスを原理とする新しい知の範型であって、近代の知が見失ったものや排除したものの(イメージ、遊戯、感性……)のもつ豊かさを正当に回復することを目指すものとして位置づけられる(中村「演劇的知とはなにか」・『文化の現在』11所収)。また理性を聖化し言語・観念を純粹化していく方向ではなく、それを本来生み出して支えている身体からだという人間の現実を、現代文明の疎外状況をふまえつつ哲学の主題にしていこうとする(市川「精神としての身体」)。学園闘争を機に大学教員を辞し住民運動に参加した花崎氏は、アイヌ文化やアジアの民衆の生活にふれることにより、人間本来の共感能力の回復と陶冶が現代の課題であることに気づき、「共感」を哲学の出発点において、「やさしさ」や「ことば」の問題、「知」の革新や「解放のイメージ」といった課題に正面から取り組んでいます(『生きる場の哲学』)。通常科学をこえようとする歴史学なり哲学のこうした探究の試みが、他の科学との精力的な対話に支えられていることはいうまでもありません。

文化学は現在、人間と文化についてのコモン・センスを求めつつ、硬直化した通常科学をこえていくという方向で、その成立が

可能となるものと思われます。

〈付記〉

本報告は、跡見学園女子大学文化学会の第一回シンポジウム「文化と文化学をめぐって」(一九八二年七月二日、学士会館本郷分館)の基調報告としてなされたものに最少限の加筆・訂正をほどこしたものである。これに続くシンポジウムは今回は紙数の関係で収録を見あわせるが、文化学における地域性の問題(新藤武弘氏)、文化の価値の問題(植松明石氏)、文化における不易と流行の問題(大江一道氏)といった文化と文化学にかかわる核心的な問題が提起された。このシンポジウムに続くその後の文化学会の活動は、二号以下で継続的に発表していきたい。

本稿は昭和五七(一九八二)年度跡見学園特別研究助成費による研究成果の一部である。

(専任・文化学原論)